



カンボジアの子ども達の 教育を支援する会

No.14 2014年11月30日

The Society of Educational Support for Children in Cambodia

☆☆これまでの主な支援実績☆☆

◎女子大学生への奨学金： 在学生（継続中）10名
卒業生 7名

※女子大学生への奨学金は原則、
2年生から卒業まで3年間の
継続支給です。

◎小・中学生への奨学金： 延べ69名

◎日本体験研修（ホームステイ）の受け入れ： 27名

◎児童書の寄贈： コッ・ブラック小学校 約1,600冊
児童館「プテアクニョム(私の家)」 約1,000冊



新しい本を見る子どもたち

◎読書教育のための研修
コッ・ブラック小学校のポー・ティダ先生を福岡に招聘し読書教育研修を実施（2011年10月）

◎小学校図書室の運営支援
カンダル州コッ・ブラック小学校の図書室の運営を維持し読書教育を活性化するために、
図書室の開館や貸し出し、管理をするパート職員を雇用するための費用を支援

◎学校の環境整備
コッ・ブラック小学校に図書室、トイレ、屋外遊具を設置
ロティアン中学校に井戸を設置



支援でできたトイレ

◎学用品、教育機器等の寄贈
コッ・ブラック小学校にクレパス、画用紙、色紙、サッカーボール等を寄贈
児童館「プテアクニョム(私の家)」に画用紙、絵の具、サッカーボール等を寄贈
ロティアン中学校に電卓、コンピュータ、プリンター、サッカーボール等を寄贈

◎SESCC 賞の贈呈
第3回王立プノンペン大学日本語学科弁論大会の最優秀者2名にSESCC 賞を贈呈

カンボジアの子ども達の教育を支援する会

—事務局—

住所：〒811-4174 宗像市自由ヶ丘西町9-4
代表 横山正幸 方

Tel/Fax：0940-33-1457

E-mail：sescfukuoka@infoseek.jp

URL：http://sescfukuoka.pepper.jp/

—郵便振替口座—

口座番号：01730-9-47392

口座名称：カンボジアの子ども達の教育を支援する会



図書室で絵本を見る二人の女の子

2014年度の総会が

無事終了いたしました



熱心に協議していただきました

2014年度総会（第8回総会）は、去る9月20日、皆さまのご協力により盛会裡に終了いたしました。
2014年度も本会の活動の目的である「カンボジアの、夢と志を持つ優秀な女子中学生・高校生及び大学生への就学支援」「カンボジアの小学校・中学校の図書室および図書への寄贈と読書教育の支援」を中心に着実な歩みを進めてまいります。
会員の皆さま方のこれまでのご支援・ご協力を深く感謝します。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

ミニ講演会のご報告

「中国・新疆ウイグルにおけるボランティア活動

—最も素晴らしい10人のお母さんの一人として中国政府から表彰された私の母の場合—

話題提供：グリシェン・アプリミティさん（福岡教育大学非常勤講師）

総会終了後は中国・新疆ウイグル自治区出身で宗像市在住のグリシェン・アプリミティさんにご自身のお母様、ライハン・カスムさん（自治区の区都ウルムチ在住、現在75歳）のボランティア活動についてお話をいただきました。ライハン・カスムさんはウイグルの小学校や中学校、さらに大学で先生として教鞭をとってこられた教育者です。彼女は自宅で、経済的または家庭の事情で悪いことに手を染めてしまった子ども達に勉強を教え、人としての生き方を教育して学校へ戻れるよう支援する活動を続けてこられました。「学校に行かないと何が大事なことがわからない」というライハン・カスムさんの教育者としての思いはやがて30名のウイグル族の母親たちの共感を得、「愛心媽媽（ママ）」というグループでの活動に発展していきました。現在では会員数が新疆ウイグル自治区において2万人に達し、様々な子ども達へ教育の支援が行われているそうです。そして、その活動が中国政府から認められ、グリシェンさんのお母さんライハン・カスムさんは「中国で最も素晴らしい10人のお母さんの一人」として表彰されたということです。国は違っても「子ども達の教育支援」という同じ思いを持つ大勢の「仲間」がいることに励まされました。

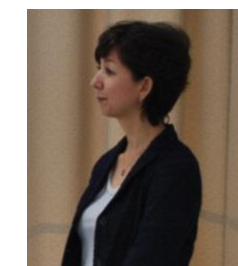
また、最近の報道で伝えられる中国・新疆ウイグル自治区の状況とは違った側面を知ることができ、直接聞いて直接語り合うことの大切さを改めて気づかされました。

現在の本会の会員数は140名で「愛心媽媽（ママ）」の2万人には会員数では及びませんが、地道な活動を続けていきたいと思っています。

（副代表 桑野 嘉津子）



グリシェンさんの話聞き入る参加者



グリシェン・アプリミティさん



交流会でのひとコマ

山陰からこんにちは！ もう一つのカンボジア支援

会員 林田宣子



林田宣子さん

こんにちは。私は今、山陰で、もう一つ「カンボジア バンテアイスレイ小学校を支援する会」に入会し、ささやかですが活動しています。

これは、2012年にカンボジアを旅行した鳥根県松江市の友人夫妻がスタートさせた会です。カンボジアの現状を目のあたりにし、

教育が一番身近に出来ることから」と始めた活動です。現在、会員は約150名。月1回10名くらいで集まり、作業をしています。学用品、タオル、カバンなどの袋物、衣服、サンダル等を仕分け、箱詰め、計量、梱包して発送します。作業は島根短期大学の図書館を借り、学生達も手伝ってくれます。送料が高く、資金面で大変ですが、1回にダンボール15箱ぐらい、年間8回送っています。

現地の旅行社やボランティアの日本人女性を通じて、小学校

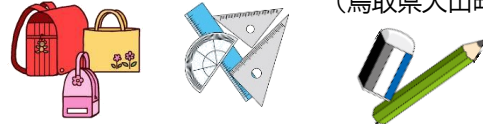
だけでなく近くの農村地帯、孤児院などへも届けてもらっています。

2014年2月には会員13名で現地を訪ね、短時間ではありましたが、交流してきました。はにかみながらも輝いていた子供たちの瞳や、貧しいけれどぬくもりを感じる親子の姿からは、生きることのひたむきさや、心の豊かさが伝わってきました。

帰国後、我が家の孫たちが通っている小学校にも支援の協力を呼びかけました。10日間ほどでしたが、用意した箱にあふれんばかりの学用品が集まり、先日発送しました。

この活動を通じて両国の子供たちや若者たちが外の世界に関心を持ち、互いに思いを寄せるようになればと願っております。

(鳥取県大山町在住)



輝く子どもたちの未来

福岡教育大学2年生 西本きよら

「カンボジアの美術と教育の実際を知る」。そのために私はカンボジアのプノンペン、シェムリアップ、バタンバン の3都市を19日間に亘って遊学した。

そもそも、私がカンボジアに興味を持ったのは、大学の授業でカンボジアの美術が戦争によって消滅されたと聞いたからだ。美術を専門とする私にとって、自由な美術が無いということが衝撃的だったのだ。そこで、CMC(カンボジア地雷撤去団体)のスタディツアーで、5日間カンボジアを訪れたのだ。そこで予想もしなかった人々の明るさと暖かさに出会い、私はますますカンボジアを知りたいと思った。そして、在福岡カンボジア領事館のスカラシップ制度で再びカンボジアを訪れた。

まず、教育を知るために3都市それぞれの学校と孤児院を訪れた。

バタンバンの小学校の教室には様々なカラー掲示物があり、運動場には怪しい色のお菓子や飲み物が売られていて、子どもたちはみなそれを飲食していた。シェムリアップの田舎の中学校では、1学年にクラスは1つで、先生は2人だけだった。進学率は1%なのに皆元気に学校に通っていた。プノンペンにはたくさんのインターナショナルスクールやイングリッシュスクールがあり、子どもたちは英語を第2言語として流暢に話していた。プノンペン大学にはCJCC(日本人材開発センター)が併設しており、日本企業などに就職できるような教育がされていた。学校が休みでも、生徒たちは学校に来て友達とグループセッションをしたり、勉強をしたりしていた。2つの大学に通う生徒も多かった。

バタンバンの孤児院では、日本人女性がボランティアで活動をしていた。その女性は、日本ではキャビンアテンダントという華やかな職に就かれていた。にもかかわらず、50歳のとき、カンボジアに渡り、ずっとボランティアを行っているのだ。子どもたちは40名ほどいて、皆キラキラした笑顔で生活していた。この日本人女性が来るまでは、生活用水も寝る場所も無かったというから驚きだ。みな、栄養失調で痩せていて体には斑点のようなものがあつた

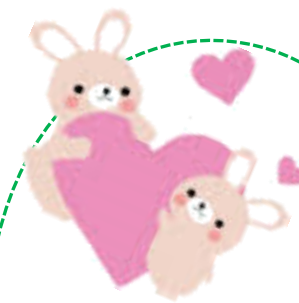
そうだ。子どもたちの笑顔からは想像ができなかった。シェムリアップの孤児院には、80名の子どもたちがいて院長はカンボジア人であったがボランティアで行っていた。子どもたちは、午前中に学校に行った後、工芸品を作って売っていた。それを貯めて進学資金としていた。私たちの世代では、買い物をする、つまり消費者という姿勢をはじめに知るのが当たり前だが、彼らは働いていた。プノンペンの孤児院では、英語やパソコン、農業、音楽、絵など幅広い分野を無償で教えていた。田舎の学校よりも発展していた。

このように、カンボジアでは同じ国でも一方では高校進学率1%、一方では高レベルの教育が行われているというような大きな差があることが分かった。この教育格差の原因は地域格差や所得格差にあるとカンボジアの友人は言った。初め私は、こういった格差があるので今のカンボジアには美術をする余裕なんか無いと言われていたし、自分もそう思うのではないかと思っていた。しかし、カンボジアの美術館、博物館とある日本人男性、そして子どもたちとの出会いがその考えを一転させた。

3都市すべての美術館、博物館に行ったが、どこの都市でも私が一番驚いた展示品は遺跡の装飾だった。産業革命時代に特に流行ったアールヌーヴォーのような装飾がアンコール時代に既にあったことは、大変驚きだった。それまで私は西洋美術にしか興味がなかったが、そこで初めて東洋の美術にもこんなに素晴らしい装飾作品があるのだと知り、カンボジアの美術文化の貴重さを改めて感じた。そして、この感性は今の子どもたちの中にもあった。シェムリアップのいくつかのレストランにはいくつかの団体の支援で子どもたちの描いた絵を飾っているところがあった。また、50代の日本人女



バタンバンのプリア孤児院の子ども達と畑仕事をする西本きよらさん(右端)



♪ママになりました♪

2009年夏、日本体験研修で福岡にホームステイしたチェン・リホーさんとルアン・チャンネアリーさんがお母さんになりました。リホーさんの赤ちゃんは、8月28日生まれの男の子メン・ハックくん、チャンネアリーさんの赤ちゃんは10月31日生まれの女の子リー・ハナちゃんです。

写真はチャンネアリーさんが出産した病院をリホーさんが訪問した時に一緒に撮ったものだそうです。

♪元気に大きくなってね♪



赤ちゃんを抱くネアリーさん(左)とリホーさん



♥原稿募集中♥

今回は鳥取県在住の会員林田宣子さんと今年4月のチャリティフォーラムに参加して下さった福岡教育大学の美術科の2年生の西本きよらさんに原稿を寄せていただきました。

これから会員の皆さまの活動や思いをお伝えしたいと思っています。

皆さまからの原稿をお待ちしています。事務局までメールまたはFaxでお寄せください。

性が無料で美術教室を行っており、そこに通っている子どもたちの絵も見ることができた。バタンバンの孤児院でも、砂場に木の棒で美しい魚の絵や細かいところまで描き込まれた銃の絵などを描いていた。彼らの絵は本当に驚くほど素敵な絵ばかりで既にアーティストであった。普段、美術館で何らかの作品を鑑賞するとき少し難しい顔で見えてしまう私が、素直な気持ちで笑顔になれる作品を子どもたちは描くことができる。しかし、この子どもたちの能力を表現する場所、伸ばす場所や道具がとても少ないのだ。

シェムリアップに、「クメール伝統織物研究所」という場所がある。そこでは、森本喜久男さんという日本人男性がカンボジアの織物を現地の人々と作って売っていた。森本さんは、京都の友禅染職人で、カンボジアの織物に惚れて来たそうだ。当時は戦争直後で文化人が多く殺された中、何とか織物職人をかき集めて織物の復興をしようと知った。

プノンペンのある小学校の生徒にどうして英語を勉強しているのかと聞くと、1人は「人生は1回しかないから英語を勉強して世界を飛び回りたいから。」と言い、1人は「僕の夢は海外でビジネスをすること。英語が話せたら色んな人と会話ができるようになるでしょう。」と答えてくれた。12歳にして将来の夢が広がっていて、それを叶えるために勉強していた。シェムリアップでは14歳の女の子が夏休みを使って店で懸命に働いていた。バタンバンでは学校に通いながら孤児院で畑仕事や家事や幼い子たちの面倒を見ている少年少女たちがいた。キラキラとした瞳で毎日をまじめに、生きている子どもたちを見るとカンボジアのこれからの未来を築くのがこの子どもたちなのかと思ひ、心が躍った。

美術と教育の実際を知るために行ったのだが、それ以上の多くを知り、学ぶことができた。これらのことに出会った今、私は自分の生き方の見直しをするだけでなく彼らとこれからも繋がり、キラキラ輝く子どもたちの未来に携わりたいと思う。

支援という言葉はなんとなく格好が良いので、ときに本当には相手の為になっていないような自己満足の支援もたくさんある。特に、今のカンボジアは先進国にとってビジネスがしやすい。占領といわずとも、ピザを分けるような国の支援は行いたくない。私は、カンボジアに適した、カンボジアの人々が自分の力で自分たちの国を盛り上げていけるような支援を、これからじっくりと関わって考え行動していきたい。

また、カンボジアについて世界遺産のアンコールワットと地雷や孤児院があるということ以外に、私たち日本人の多くは何を知っているだろうか。単なる貧しいイメージか、漠然と危ないというイメージが多いのではないだろうか。実際に、カンボジアに行く途中で多くの日本人に出会ったが「カンボジアはアンコールワットだけいい。」という言葉をどれほど聞いたことか。私は、カンボジアという国の豊かなことを広く日本人に伝えていきたい。これらが、私の夢の一つだ。



孤児院の子どもたちと西本きよらさん(右端)

